

- 6 世紀の日本

5 世紀には日本とアジア諸国間での往来が増え、新しい技術が日本に入って来た。日本最古の製鉄用の炉はこの頃のもので、須恵器という新種の陶質土器の窯もこの頃に登場した。窯は丘陵に立てられ、1000℃以上になり、頑丈で灰色がかった陶器ができた。最大の生産地は大阪にあった。現在の堺市と和泉市近辺で、ここにある古墳からは多くの須恵器が発見されている。5 - 6 世紀の古墳には須恵器が収められ、これ以前の古墳よりもさらに多くの鉄が入れられた。

5 世紀の終わりまでに、金が最も好ましい埋蔵品の材料になった。この時代の古墳には金めっきが施された刀や乗馬用具、宝石や金の王冠、履物などが収められるようになった。4、5 世紀の鉄よりも、金は権力があることを表わしている。これは鉄の生産が容易になったことと関係する。金を手にできるほど裕福な者は非常に少なく、この時代の古墳調査から、古代学者たちは時代の社会的な階層化について把握することができた。

6 世紀の間に古墳のサイズは小さくなり始め、上部に封じ込めた埋葬施設がある設計から、さらに亡骸を収めるために再び開けられるように、水平な外部への通路をもつ埋葬施設の設計へと変わった。勢力のある豪族たちはまだ大掛かりな古墳を建てていたが、小さめの古墳がかなり一般的になった。

修羅と近代科学的な文化保存

古墳で見つかる木製の出土品は非常に珍しい。博物館に展示されている現存する最も重要な出土品の 2 つは木ぞり（修羅）で、古墳の築造時に巨大な石を運ぶために使われたと考えられている。この博物館の大きい方の修羅は、カシの木から作られていて、長さ 8.8 メートルで、重さは約 3 メートルトンある。側面の穴は、木製のコ口に修羅を乗せ牽引するための綱を取り付けるために使われたのではないかと専門家は考えている。2 つの修羅は地中に埋もれていたため、保存状態は良かった。泥を取り除いた後に木材が劣化してしまうことを防ぐために、木の中の水分はポリエチレングリコール化合物に徐々に入れ替えられた。この処理は終了までに 14 年かかった。